

## 健康を創り出す口腔保健・歯科医療の展開

### Perspectives of promoting general health through oral health and dental care

すべての臓器（器官）は、お互いに関連して機能し、生体は維持され心身の健康が保たれている。また、病因関係もお互いが影響しあっていることが多い。それに対してわが国の医療制度は、これまで医科歯科二元論で成り立っており、あたかも歯・口腔という臓器が全身の臓器とは別個のものとして扱われてきた面がある。

人々にとって食べることや発話・表情形成というコミュニケーションは、全身の健康に深く関わる問題として一般的に認識されているばかりでなく、研究分野でも口腔と全身の健康との関連が指摘されるようになってきた。例えば、ある種の口腔内細菌が誤嚥性肺炎の原因となり、適切な口腔ケアによって高齢者の肺炎による死亡を約40～50%予防できるという疫学的根拠は、従来の口腔の健康に限定されていた口腔保健・歯科医療の展開とその意義を大きく変えるものであった<sup>1)</sup>。しかしながら、このような口腔と全身の健康に関する研究は始まったばかりであり、多くの現象がまだ解明されていない。特に、口腔疾患や口腔保健状態の低下がある種の全身疾患を引き起こすということにとどまらず、口腔保健や口腔機能の向上が、全身の健康をいかに増進していくかという観点からの研究と現場での展開は、極めて乏しい。

一方、2008年度からわが国では、高齢者と成人を対象とした新しい保健医療制度がスタートした。地域包括ケアと医療連携を基盤とした後期高齢者に対する医療制度と、成人の生活習慣病予防を主体とする健診・保健指導制度である。これらいずれにおいても、口腔保健・歯科医療に求められている期待と課題は大きい。

全身の健康を創り出す口腔保健・歯科医療の展開を考える場合の研究および保健医療制度に関する課題のひとつに、健康度の測定の問題がある。疾病の診断は検査を中心とした医学体系のなかで捉えられるのに対して、健康はこのような「医療モデル」を超えて「生活モデル」のなかで評価されるものであり、単に疾病の有無ではなく、機能、保健行動、支援的環境、QOLなどを含んだ包括的な概念である<sup>2)</sup>。このような概念に基づいた評価指標が歯科医学・歯科医療のなかで確立していくことを通して、全身の健康に寄与する口腔保健・歯科医療の評価が定まっていくと考えられる。また、う蝕と歯周病に代表される口腔疾患は、その発病も予防もその人の行動に左右させる面が大きく、これまで口腔疾患の予防という観点から捉えられてきた口腔保健行動を、全身の健康を増進する行動（health promoting behavior）と健康を阻害する行動（health damaging behavior）に再構築していくことが求められる（図1）。

神経生理学者のペンフィールド（Penfield W, 1891-1976）の脳皮質運動野および体性感覚野を調べたマップ、あるいはそれを同比率で再構成し図示した「ホムンクルス」において口腔に関する領域が極めて広く、生命活動における口腔の働きは大きい<sup>3)</sup>。口腔疾患への対応にとどまっていた口腔保健・歯科医療を、全身の健康増進の観点から再構築する意義は高い。

深井 穂博

深井保健科学研究所所長

Kakuhiro Fukai, D.D.S., Ph.D

Director, Fukai Institute of Health Science

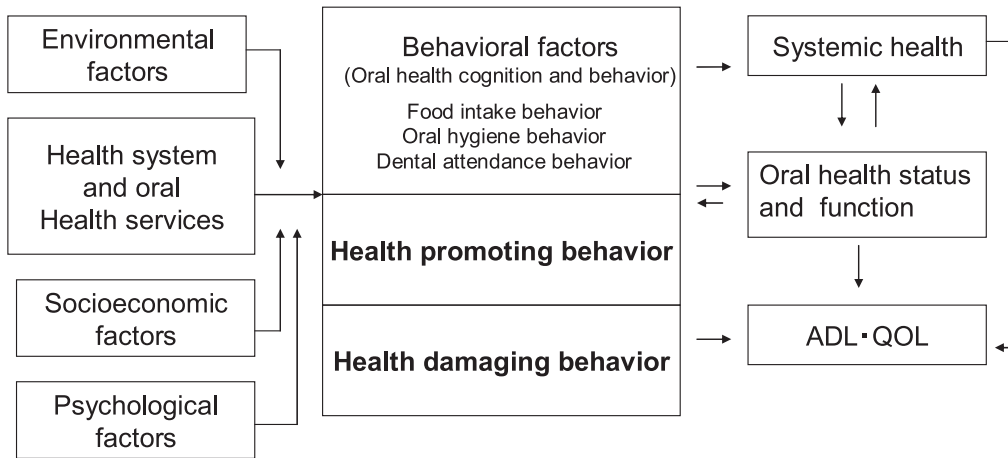


図1 Health behavior oriented health promoting process

文 献

- 1) Yoneyama T, Yoshida M, Ohru T, et al.: Oral care reduces pneumonia in older patients in nursing homes, J Am Geriatr. Soc., 50 : 430-433, 2002.
- 2) 深井獲博：新しい口腔保健指標とヘルスプロモーションへのアプローチ，ヘルスサイエンス・ヘルスケア，7：1-3, 2007.
- 3) ワイルダー・ペンフィールド（塚田裕三，山河宏訳）：脳と心の正体，法政大学出版局，1987年，第1版，東京，80-91頁